

心理アセスメント技法としての箱庭の可能性

丹 治 光 浩

一般に、箱庭はアセスメントツールとしてではなく、セラピーツールとして利用されている。一方で、多くのセラピストは箱庭作品から制作者について多くの情報を読み取り、それを心理治療に生かしているという事実がある。

そこで、筆者は、これまでの箱庭に関する基礎研究と臨床事例をもとに心理アセスメント技法として箱庭を利用することの可能性について考察した。その結果、制作者の情報に十分な配慮をし、常識的な解釈をすることで、アセスメント技法として箱庭を利用することは可能であることが示された。

キーワード：箱庭、心理アセスメント、解釈

Sandplay is generally used as a therapeutic tool, rather than as an assessment tool. On the other hand, therapists get much information about the creator from a sandplay work and they utilize it for psychotherapy. Based on past theoretical and clinical case studies on sandplay therapy, the possibility of using sandplay as a psychological assessment technique was investigated. Results indicated the possibility of using sandplay as a psychological assessment technique and also suggested the need for considering the creators' information and to making interpretations from a commonsense perspective.

Key words : sandplay, psychological assessment, interpretation

1. はじめに

心理アセスメント技法として箱庭を利用することは邪道であろうか。いうまでもなく箱庭療法は、Lowenfeld (1939) が子どもための心理療法として提唱した技法を Kalff (1966/1972) がユング心理学を導入することで大きく発展させた心理療法の一種である。

一方、Bühler (1950) は、その診断的立場に着目し、玩具の種類を規定するなどして世界テスト (World Test) を完成させ、その後、Bolgar & Fisher (1947) が Bühler と同様の方法で成人のための世界テストを開発した。これらのテストに共通する特徴としては、「砂が用いられないこと」「アイテムの種類と個数が決められていること」「分析基準が設定されていること」の3点が挙げられる。ま

た、Erikson (1950) が開発した DPT (Dramatic Productions Test) も箱庭の心理テストとしての応用であるが、「映画ごっこは面白いと思うのですが、この玩具を使って、あっちのテーブルにドラマティックな場面を作ってみて下さい」といった独自の教示と精神分析的解釈を導入した点に特徴がある。

しかしながら、これら一連の研究は実用性の問題や研究者の興味の移り変わりによってその後の発展はみられなかった。ただし、竹内 (2007) は、フランスで発展した「村テスト (Test du Village)」だけは現在も市販されていることを報告している。

また日本でも、幼児の情緒障害診断への試みとしての世界テストの追試 (岡田、1962) や、大学生を対象に DPT と同じ教示を用いて作品への影響を探究した研究 (山下、2004) など、若干の報告

はあるものの、箱庭の心理アセスメント技法として応用はほとんど研究されていないと言ってよいだろう。それは、日本に箱庭療法を紹介した河合(1969)が、Kalffの流れを重視し、心理療法としての位置づけを明確にしたことが影響していると思われる。

しかしながら、完成した箱庭作品やその制作過程に制作者の心理が反映されることは確かであり、多くの臨床家は箱庭作品を解釈することで治療上有益な情報を得ているという現実がある。さらに箱庭療法を実践しているたいていの臨床家なら、クライアントからコメントという形で箱庭作品の解釈を求められることを経験しているだろうし、実際に印象という形で何らかのフィードバックをすることも少なくないであろう。

たとえば、平松(2007)は、「スクールカウンセラーとして学校現場に入っていると、生徒が何気なく作った箱庭を見せられて『先生、この箱庭はどうでしょう』とまるで箱庭を見ればその生徒の深層心理が見抜けるはずとの要望がある」と述べている。また、三木ら(1991)は、箱庭を使った自己啓発セミナーでコメントを求められたときにどの程度のことを言って返すのが安全で有益かといったことを述べている。こうした背景には、箱庭に心理テストと共通する期待があるとあってよいだろう。

このような中、三木ら(1991)は、「テスト方向の箱庭について」という一節の中で、家族関係診断テストとしての箱庭を紹介しているが、たとえば丹治(1988)が報告した合同箱庭療法の実践などは広い意味で家族関係診断テストとしての箱庭利用といってもよいだろう。また、野田(1995)のように、箱庭を治療法としてではなく、学校現場における生徒理解の手段として利用している臨床家もいる。

箱庭を心理アセスメント技法として使用する可能性について平松(2001)は、「箱庭作品によってクライアントのことがよくわかるというのは、クライアントの主訴や生育歴、その時の面接過程におけるクライアントの状況などを総合して見ると、なるほどと思われることが多いという程度のものである」と述べている。つまり、箱庭に一般の

心理検査ほどの精度はないというわけである。確かに筆者の経験でも治療経過の中でみられる箱庭作品の変化(バリエーション)は心理検査の変化に比べて大きいように思われる。

しかし、一方で、作品全体の流れの中にクライアントらしさが一貫して見られることも事実で、たとえば同一被験者が作成した2つの箱庭から再検査信頼性を確認した藤井(1979)の研究や、繰り返し制作された箱庭作品に個人の特徴が保たれることを報告した大石(1983)の研究は注目に値する。

平松(2001)の「クライアントの主訴や生育歴、その時の面接過程におけるクライアントの状況などを総合して見る」という視点は全ての心理検査に共通する視点であるし、少なくとも技法的には描画と箱庭の間に本質的な差異はないと筆者は考えている。

以上の点から筆者は、箱庭を治療技法としてではなく、心理アセスメント技法として利用することができるのではないかと考え、本論で文献と事例をもとにその可能性を探った。

2. 実施法について

箱庭を心理アセスメント技法として成立させるためには、まずかつての世界テストのように玩具などの手続きを統一し、標準化作業をする方法が考えられる。しかし、欧米と違って日本の場合、箱の大きさは統一されているし、逆に玩具の数を無視しても差し支えない程度の豊富な玩具が用意されている。つまり、表現形態や表現手段に多様性が認められている描画に心理検査と心理療法の両面性があるのと同様に、通常の箱庭制作にも心理検査としての実用性があると考えられる。

また、箱庭を心理アセスメント技法として利用する場合、先に紹介したDPTで用いられている特徴的な教示や「ここに自分自身を表現して下さい」といった直接的な教示を用いることで投影性を高めたり解釈を容易にすることができる可能性がある。この点について筆者は次にあげるような小調査を実施したので紹介したい。

筆者は、2010年5月～6月にかけて臨床心理学を専攻する大学院生6名(男性3名、女性3名)に

対して、バウムテストと2条件での箱庭制作（通常の教示で行った自由制作と「自分自身を表現して下さい」という教示で行った自己表現制作）を実施した。次に、6人の被験者をよく知る9名の臨床心理士（男性4名、女性5名）で18作品（バウムテスト6枚、箱庭12作品）が誰の作品かを推測してもらったところ、平均正解率は、バウムテストが29%、自由制作の箱庭が23%、自己表現の箱庭が29%であった。サンプル数が少ないので統計的な検定は行っていないが、本調査の結果からみる限り、バウムテスト（投影法検査）に比べて箱庭作品に個性が反映しにくいといった傾向はなく、また教示法による差異もほとんどないと思われる。

以上の点から、心理アセスメント技法として箱庭制作に際して特別な用具や教示は必要ではなく、従来使用されている箱庭用具一式と通常の教示を用いて被験者に作品の制作を促せばよいと考えられる。

3. 解釈法

(1) 基本的な考え方

河合（1969）は、作品の見方について、①全体的な布置、②主題、③象徴的理解、④系列的理解の4点をあげている。また、平松（2007）は、「箱庭として集約的に表現された作品（イメージ）の色合い、形態、空間配置、象徴性、主題、物語性などによって、クライアントの心の状況が把握できる」と述べている。しかし、クライアントの箱庭表現が多義性を持っていることは種々の描画テストと同様であり、紋切り型の解釈を慎み、クライアント（制作者）の臨床像などを考慮することで初めて妥当性のある解釈が可能になるものと考えられる。

また、いくつかの指標を設定して結果を数量化する方法が考えられるが、バウムテストやSCTなどが結果を数量化することなしに臨床上きわめて有用な心理検査として広く使用されていることを考えると、これも必須条件ではないように思われる。

さらに、三木ら（1991）は、セラピストとクライアントとの関係性が箱庭作品に反映される可能性

を指摘しているが、これも全ての描画テスト（場合によっては全ての心理検査）に共通する問題である。たとえばロールシャッハテストの検査者と被検査者との関係が検査結果に影響を与えることは周知の事実である。つまりこうした特性や限界を考慮した上で利用することが重要なのではないだろうか。

(2) 全体的印象

従来、箱庭作品の解釈に際しては、まず全体的な印象が重視され、それをそのまま制作者の心理状態として解釈されることが多い。「温かい」「寂しい」「固い」「まとまりがない」といった表現には検査者の主観が混入する可能性はあるものの、それは検査者の臨床経験によってある程度解決されるであろう。これは、バウムテストなどの描画テストでも同様である。

(3) 配置と方向性

玩具の配置と方向性については岡田（1972）や杉村（1980）らによってグリユンワルドの空間図式（図1）の有用性が検証されているが、箱庭の場合、さらに3次元表現が容易である点が特徴として挙げられる。特に奥行き表現については、ロールシャッハテストにおける通景反応と同様に物事を

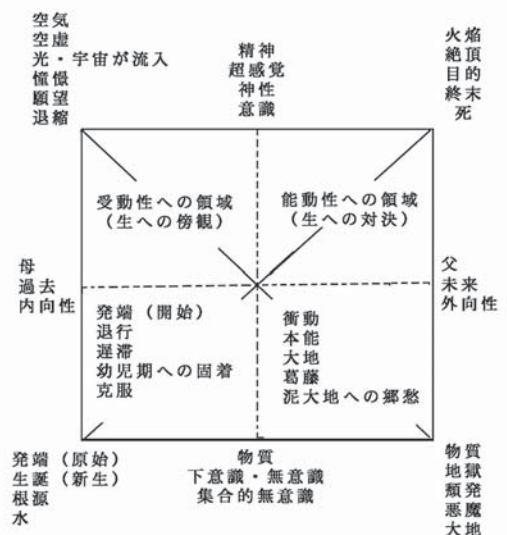


図1. グリユンワルドの空間図式

客観的に見つめる知的な作業が必要であろうし、山の上の人物や木に止まる鳥など垂直方向の立体表現は、物事を俯瞰的に把握しようとする心理の表れとして解することができる。

(4) 配色

色彩と感情の結びつきについては、単に経験的、象徴的な解釈に留まらず、色彩心理学の分野における多くの調査や実験によって明らかにされている。たとえば、色彩が表す意味(表1)については、日常生活のさまざまな場面で応用されており、箱庭作品の解釈においてもその援用が期待される。

表1. 我が国におけるバーバル・ステレオタイプの代表例

色彩	バーバル・ステレオタイプ
赤	情熱、活気、誠心、愛情、喜悦、歓喜、闘争
橙	陽気、気楽、嫉妬、わがまま、疑惑
黄	希望、発展、光明、歓喜、快活、軽薄、猜疑、柔軟
緑	平和、親愛、公平、成長、安易、慰安、理想、柔和、永久、青春
青	沈着、冷淡、悠久、真実、冷静、静寂、知性
紫	高貴、優雅、優美、神秘、謹厳、複雑
白	純潔、潔白、清浄、素朴
黒	厳肅、莊重、静寂、沈黙、悲哀、不正、罪悪、失敗

出典：松岡武(1972)色彩象徴テストの原理と方法 日本製版

(5) 玩具の数と種類

使用玩具の数については、活動性、エネルギーのレベル、外界への関心、強迫的傾向との関連が見出されている(木村, 1985)。砂だけのエネルギーギッシュな表現が可能のように表現の多様性は加味するべきであろうが、こうした所見は経験的にも支持されるのではないだろうか。因みに、使用玩具数の平均値については木村(1985)と岡田(1984)が、大学生を対象にそれぞれ43.6個、45.0個と報告している。

また、使用する玩具の種類については、興味・関心の範囲や内的の豊かさを反映していると考えられる。木村(1985)は、ロールシャッハテストにおける(Dd+S)%との間に有意な関連が認められたことから、使用する玩具の種類が少ない人は個性的な感受性と知的な高さ持ち合わせており、種類の多い人は自由で好ましい平凡さを持っている

と考察している。なお、その平均値については、木村(1985)が4種類、野田(1995)が4.3種類と報告している。

(6) 制作時間

制作時間については、岡田(1984)が正常群において有意に制作時間が長いことを報告している一方で、木村(1985)が劣等感との間に有意な相関を見出しているように一貫した傾向は認められていない。これは、意欲、思考力、抵抗感、活動性、自信などさまざまな要因が複雑に影響し合っている結果と考えられ、単純な解釈が難しいことを示している。因みに、岡田(1984)によれば、箱庭制作の平均所要時間は20分で、平均初発時間は30秒と報告されている。

(7) 内容(テーマ)

内容(テーマ)については、従来の象徴的解釈だけでなく、西村(2001)が長年の臨床経験から「常識的な解釈」の重要性を指摘しているように、単に制作者であるクライアントの興味関心の領域として解釈することが可能である。たとえば、街、戦い、家庭などはそのまま興味関心の領域を示していると考えられる。表2は、西村(2001)が提唱した箱庭表現内容の分類をまとめたものである。

ただし、木村(1985)が、ロールシャッハテス

表2. 箱庭表現内容とその意味

分類	具体例	意味
人間世界	人、自動車、病院など	人間の実際生活
	冊、信号	人間の行動を統制するもの
植物	樹木	精神性、伝統、知性
	花	華やかさ、優しさ、女性性
	芝	身体への愛着の衝動
動物	家畜、ペット類	統制可能な衝動
	野生動物	統制困難な衝動
	爬虫類	より深い衝動
建物	住居	自分や身近な人の住まい
	公共建造物	社会的な関係
	宗教的建造物	心の安定、精神生活の支え
自然環境	山、川、草原、海	生活の状況や流れ

トにおける A% や H% と箱庭表現における動物や人間の使用との間に有意な関連が見られなかった理由として両手法の反応プロセス（作業）の違いを指摘しているように、さまざまな可能性を加味することは重要な視点であろう。

4. 基礎研究から得られた解釈仮説

表3と表4は、それぞれ岡田(1984)、木村(1985)をもとに適応と箱庭表現との関連、および発達の観点から箱庭の特徴をまとめたもので、表5はその他のいくつかの基礎研究をもとに症状、問題別の箱庭の特徴をまとめたものである。

これらの中でも、特に砂の使用に関しては、片岡ら(1995)や永井ら(1995)など多くの研究によっても検証されている。さらに、片岡ら(1995)

が、適応者において初発時間が短く、神経質な人に訂正が多いことを報告し、永井ら(1995)が、自我同一性達成群において植物の使用が多く、乗り物や建造物を使用することが少ないことを見出しているなど、有用な研究が数多くなされている。

一方、箱庭作品の理解としては、従来「山は権威の象徴である」とか「冊は防衛心を表す」とか「マンダラは心の統一性を示す」といった象徴的解釈がなされることが多い。今回、残念ながらこうした象徴的解釈仮説を統計的に検証したものは見つけられなかったが、こうした象徴的解釈の有用性はこれまでの臨床の中で広く支持されており、今後も積極的に解釈に取り入れてもよいのではないかと筆者は考えている。

表3. 適応と箱庭表現の関係

砂	砂への接触は、生産性、豊かな内面、低い劣等感、安定した情緒、客観性、協調性を示す。
人物	人物の使用は適応性の表れで、人物の不在は、個人的な思考を示す。
動物	動物は、感情表現の自由さを示すが、そのイメージは個人的要因が大きい。
植物	植物の使用量は、常識性や情緒の成熟と関連し、通常、5～38.9%の作品に見られる。
印象評定	SD法による6次元分類では、健常者群は動的統合型、精神障害者群は積極的防衛型が多い。

表4. 発達の観点からみた箱庭表現の特徴

群	特徴
幼児	羅列、玩具を使った箱内での遊びが中心で、まとまりがなく、雑然としている。人間類はやや少なく、動物が多い。
小学生	男子には戦い(怪獣)、車、女子には庭、遊園地(遊具)が多く出現する。人間類は、1割程度に見られるようになる。
中学生	家、庭、郊外、牧場など表現に多様性がみられる。戦い表現には人間が出現する。作品の高さ、砂への接触頻度が上昇する。
高校生	結婚式など理想や人生の夢の世界が表現されることが多い。植物類は、年齢とともに増加し、森をテーマとする作品が多くなる。
大学生	男女差がなくなり、現実場面の表現が多くなる。町や村、戦い、公園、動物園などテーマが多彩になる。

表5. 症状、問題別の箱庭の特徴

症状、問題	特徴
統合失調症	テーマがなく、人物はいないか一人だけの表現が多い(大石、1988)。箱の枠に沿った特異な冊、川で分断された領域、空白領域が見られる(平松、1998)。
不登校	テーマとしては、自然、ジャングルが多く、郊外が少ない。二重枠、空白領域が多い(斉藤、1992)。
アルコール依存	庭園、水をテーマとした作品が多く(草野ら、1990)、人が少ない(草野ら、1993)。
精神発達遅滞	テーマが不明で、羅列的である(岩堂ら、1970)。空虚性、無秩序性、解放性が認められる(大石、1977)。

5. 実際の解釈例

次に事例を通して、実際にいくつかの作品の解釈を試みたい。いずれの作品も制作者（クライアント）にとっては初回の箱庭である。

事例1：A子（33歳、パート）

主訴（診断）：情緒が安定せず、すぐに泣けてしまう。（不安障害）

家族：夫（35歳、専門技術職）、長男（7歳、小学2年生）

現病歴：1年前に父親を亡くした際、葬儀場で気分が悪くなり、それ以後、死に関連する話を聞いたりテレビ番組を見たりすると怖くなって涙が止まらなくなる。1周忌を過ぎても状態が安定しないため、精神科を受診した。薬物療法とともにカウンセリングが導入されたが、自分の気持ちを言語化することが難しい状態だったため、箱庭療法を導入することになった。



写真1. 結婚式

箱庭の説明：結婚した2人を周囲の人々が祝福しているところ。花が咲いていて、虹は2人の明るい将来を暗示している。

解釈：虹の下に人々が集う様子は色彩的にも明るい印象であるが、使用領域は箱の半分ほどで、玩具の数も22個と明らかに少なく、心的エネルギーの低下が顕著である。また、使用領域の少なさから萎縮した自我が見て取れる。周囲の人々は2人

を祝福しているとはいうものの、視線は2人の方を向いておらず、その結びつきは弱い。これは、A子の人間関係の希薄さを示唆している。花の存在や制作中砂に触れなかったことから受動性が示唆される。また、人生の門出を意味する結婚式のテーマは、父親の葬儀（旅立ち）のイメージと重なり、その不安と葛藤の存在が示唆される。

事例2：B男（14歳、中学2年生）

主訴（診断）：気管支喘息

家族：父（42歳、自営業）、母（39歳、自営業）、兄（17歳、高校2年生）

現病歴：5歳のときに小児気管支喘息と診断され、以後通院治療を続けていた。本が好きで、学業成績は常に中の上をキープしていたが、ときどき喘息発作のため学校を休まなければならなかった。喘息発作は特に冬に多く、ギリギリまで我慢して重症化する懸念があったため、入院治療に切り替えることになった。主治医から心因（不安）の可能性を指摘され、箱庭療法を導入することになった。

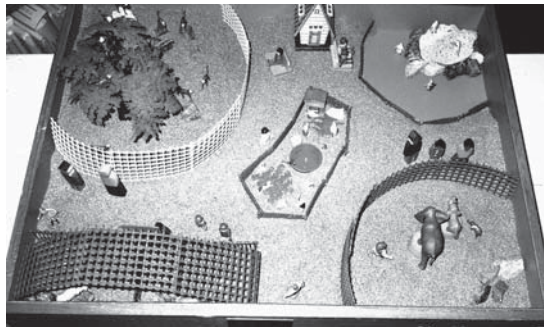


写真2. 動物園

箱庭の説明：動物園に遠足にきたところで、自分は真ん中でウサギを見ている。（30分以上掛けて丁寧を作る）

解釈：全体的に非常にきれいにまとまっている。特にペンギンのいる池には砂粒一つ残されておらず、強迫的パーソナリティが見てとれる。また、使用玩具の数は100個以上で、要求水準の高さも考えられる。

動物は種類ごとに冊によって丁寧に区切られているだけでなく、（左下のライオンとトラのゲージ

では)屋根までセッティングされ、防衛的で衝動統制の強さが示唆される。テーマは遠足という集団活動場面であるが、作品中のB男は一人で行動していることから人間関係はそれほど積極的でないことがうかがわれる。

事例3：C子（14歳、中学2年生）

主訴（診断）：選択性緘黙

家族：父（46歳、会社員）、母（40歳、専業主婦）
現病歴：幼少時から身体が弱く、熱発などで病院通いが多かった。それでも学校を休むことはなく、勉強もそれなりにしていたが、成績は全体に振るわず、5段階で2程度だった。友達といえる子どもは小学校を通して近所に一人いただけで、学校ではほとんど一人だった。質問されても頷き以上の反応がないため、今のままでは高校入試の面接が心配との担任教師の勧めで、精神科を受診した。



写真3. 無題

箱庭の説明：聴取できず。

解釈：木や花で何重にも守られた池に佇む人たちが表現されている。池には鴨やオットセイが置かれ、木々の間には鹿やウサギがいる。静かな自然と何重にも囲まれた植物群から受動的で大人しい性格と容易に他者との関係を持たないC子の心性が推測される。

また、家族と思われる人間が表現されていることから全くの孤独感を感じられないし、色彩的にも決して抑うつ的ではない。精神的には安定している状態とみてよいだろう。

事例4：D子（20歳、看護学生）

家族：父（50歳、会社員）、母（50歳、看護師）、妹（18歳、高校3年生）、弟（15歳、中学3年生）
生育歴：小さい頃から運動が好きで、小学校4年生から高校までバスケットをしていた。中学生のころから母の影響もあって看護師になることを決めていた。仕事もしたいが結婚も早くしたいと思っている。箱庭は精神科実習中に興味を持ち、個人の希望によって実施した。

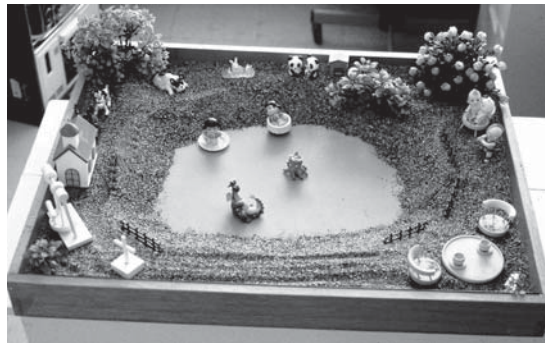


写真4. 水遊び

箱庭の説明：子どもが友達同士で池に来て、遊んでいるところ。大人はいないけれど、動物達に見守られ、楽しいひと時を過ごしている。

解釈：植物や動物に囲まれた池のテーマは事例3と同様であるが、内閉的な印象はない。2人の子どもだけでなく、パンダ、キューピー、椅子、コーヒーカップなどペアで置かれているものが多く、特定の人間関係（恋人）を意識していることが推測される。

精神的には安定しているものの、テーマと登場人物（動物）などから依存性や精神的退行への欲求が示唆される。そう考えると、教会は宗教的なイメージより結婚式などへの憧れの表現なのかもしれない。

事例5：E子（13歳、中学1年生）

主訴（診断）：小児気管支喘息、精神発達遅滞

家族：父（45歳、会社員）、母（45歳、専業主婦）、兄（16歳、高校1年生）

現病歴：幼少時からおとなしい子どもであった。4歳のときに気管支喘息を発症し、以後通院と服薬

で対処してきた。普通学級に通っていたが、成績はほぼ最下位で、2桁の足し算がおぼつかない状態である。中学校に入学後、喘息発作が頻発するようになり、3回ほど短期の入院をした。その後、ますます勉強についていけなくなり、入院治療をしながら近隣の特別支援学校に通うこととなった。ところが、新しい環境になかなか馴染むことができず登校渋滞を示したため、精神科を紹介された。

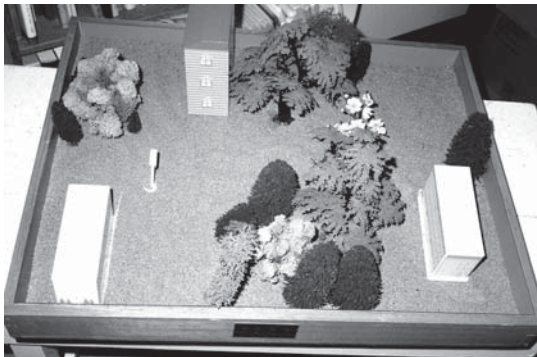


写真5. 病院と学校

箱庭の説明：入院している病院と通っている学校を作った。生徒は授業中なのでいない。

解釈：箱庭に拒否的ではなかったが、なかなかイメージが湧いてこないようで、開始から3分後によく学校を置いた。玩具の数も明らかに少なく、エネルギーは感じられないし、色彩もモノトーンに近い。実際の生活場面を表現することは、想像力や表現力の乏しさと考えられるが、同時にE子の生活が病院と学校の間で営まれていることを示している。また、場面は授業中との説明だが、人間が置かれていないことから人間関係の希薄さもうかがわれる。

事例6：F男（16歳、高校1年生）

主訴（診断）：失足失歩（解離性障害）

家族：父（46歳、農業）、母（40歳、農業）

現病歴：幼少時から病気がちで大事に育てられた。学業成績はふるわなかったが、登校は問題なくしていた。ただ、同級生からからかわれることが多く、登校を渋ることがときどきあった。運動が苦手で、中学では園芸部に入っていた。高校に

入学後、原因不明の痛みで歩くことができなくなり、整形外科を受診したが異常は見つからず、精神科を紹介された。



写真6. 戦い

箱庭の説明：戦争をしている。敵とか味方はなく、力は同じくらい。

解釈：最初から戦闘場面が表現される作品は高校生には少なく、精神的未熟さが感じられる。テーマからは心理的な葛藤が示唆されるが、右側の兵士が植物の陰に隠れていること、両群の戦車が植物でカモフラージュされていることが特徴的である。これらは、意識化されない攻撃性や防衛意識を示していると考えられる。全体的にモノトーンで、豊かさは感じられない。

事例7：G男（12歳、小学6年生）

主訴（診断）：家庭内暴力

家族：父（46歳、会社員）、母（40歳、専業主婦）、妹（10歳、小学4年生）

現病歴：幼少時は気弱で大人しい子どもだったが、頑固なところがあり、欲しい物があると長時間駄々をこねて親を困らせることが度々あった。妹をいじめるため父親に叱られることが多く、3年生のときに家出をしたことがある。学校では、友達もいて何とか適応していたが、忘れ物が目立ち、担任からも注意されることが多かった。

箱庭の説明：台風が来て、町がぐちゃぐちゃになっているところ。ドロボーが警察から逃走して、動物園からライオンが逃げ出した。仮面ライダーもやられたけど、ウルトラマン（G男）はお化けと戦っている。



写真7. ぐちゃぐちゃになった町

解釈：一見して混乱した心理状態が表現されている。衝動性はほとんどコントロールされていないように思われるが、神社や城、教会などの宗教的な建物は被害を受けていないことから、何らかの支えは残されていると解される。また、中央の信号機が健在であることから、コントロールへの意図と可能性が示唆される。さらに、お化けと戦っているウルトラマンがセルフイメージとなっていることから、この混乱が単なる混乱や衝動性の発露ではなく、意味のある戦いであることが考えられる。

事例8：H子（15歳、中学3年生）

主訴（診断）：不登校（適応障害）

家族：父（45歳、会社員）、母（46歳、会社員）、弟（12歳、小学6年生）

現病歴：幼少時は非常に敏感な子どもで、大人の顔色をよくうかがっていた。積極性はないが、誰とでも仲良くなるので、学校で問題となることはなかった。また、低学年の頃から成績は優秀で、特に中学校に入ってからトップクラスを維持していた。

中学校2年生のときに学級委員に選ばれたが、人前に出ることを好まないH子はうまく役割をこなすことができず、周囲の批判を浴びることとなった。以後、倦怠感や体調不良を訴えて学校を休むことが多くなり、3年生になってからはほとんど登校できなくなってしまった。

箱庭の説明：静かな田舎で、親は農作業をしている、子どもは川で船遊びをしているところ。左上



写真8. 田舎の風景

は城で、右上は五重塔。

解釈：知性的で静かで落ち着いた作品であるが、防壁に守られた2つの建物（城と五重塔）が印象的である。いずれも小高くなっており、H子の説明では、砂が崩れないようにするための囲いだそうだが、何十にも張り巡らされた防壁は、明らかに防衛的な心性を表現している。

親は働いていて子どもと一緒にいる様子はない、そのままH子の家庭内の人間関係を彷彿とさせる。H子自身が親に負担をかけないようにしているのか親の方が距離を置いているのかはわからないが、子どもは仲間と一緒にいるし、川上には子ども達を見守ってしてくれる鳥居が置かれていることから何らかの精神的守りはあることが推察される。ただし、左下の鬱蒼とした森についての説明はなく、心の深層部分についてはまだよく分かっていないのかもしれない。

事例9：I子（14歳、中学2年生）

主訴（診断）：不登校、精神発達遅滞

家族：父（35歳、建築業）、母（35歳、パート）、妹（13歳、中学1年生）、妹（11歳、小学5年生）

現病歴：両親は、家族の反対もあってI子が生まれてから入籍した。3歳児検診などでは特に指摘を受けなかったが、始歩、始語が1歳半と若干発達の遅れがあった。幼稚園では友達も多く、嫌がらずに登園したが、小学校に入学後は理由なく登校を渋ることが頻繁にあった。学業に付いていけないことから、何度か特別支援学級を勧められたことがある。中学校に入って、いじめられることがあ

り、I子自身の希望もあって特別支援学級へ入ることになった。しかし、2年生の7月以降は全欠状態になり、児童相談所を経由して精神科を受診することとなった。



写真9. 家

箱庭の説明：家と庭。こんなところに住みたい。犬を3匹飼っていて、滑り台やブランコやプールもある。お金持ちなので、ヘリコプターも持っている。

解釈：I子の憧れの家を表現したもので、明るい配色はエネルギーも感じられる。気になる部分としては、人間が全く登場しないことである。I子は5人家族で、近隣には祖父母も住んでいて、頻繁な交流があることを考えると、心理的に希薄な家族関係が示唆される。

また、砂を掘ってプールを作る力があるにも関わらず、魚が泳いでいる池（右下）には水が表現されず、ヨットは車と一緒に陸地に置かれていること、また、テーブルと椅子、ヘリコプターなどが大きさや配置を気にせず置かれていることは、知的な問題とともに現実感覚を失ったI子の心理状態の一面を表していると考えられる。

事例10：J男（58歳、特別支援学校校長）

家族：妻（55歳、元教員）

生育歴：若い頃はスポーツ万能で、学生時代は陸上部に所属していた。弟が障害児だったこともあり、高校生の頃には将来教員になろうと思っていた。27歳で結婚し、一男一女をもうける。妻は、結婚後も働いていたが、身体をこわして3年前に退職した。

以前から箱庭療法に興味があり、自らの希望で実施することになった。

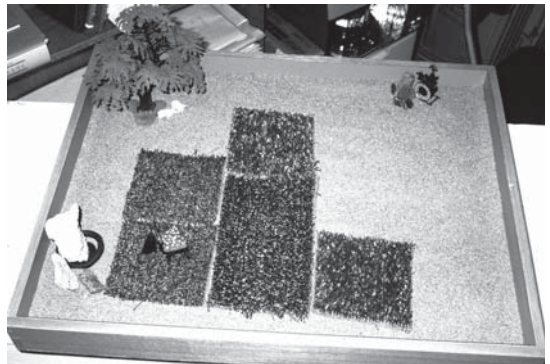


写真10. 静かな時間

箱庭の説明：広場に椅子が一つあり、人を待っている。（右上には）時計が時間を刻み、（左下には）ヘビがとぐろを巻いている。意味は特に考えずに作った。

解釈：使用玩具の数は20以下と明らかに少なく、空虚で静かな作品に仕上がっているものの、15分近くかけて考え抜いた結果としての作品であることを考えると、（意図していないとはいえ）それぞれの玩具が深い意味を示しているように思われる。全体的に観念的な作品となっており、左上の木陰に佇む2匹の羊（夫婦）と中央の椅子（職場）は、現在の生活を表し、右上の時計は残された時間に対する思いが表現されているのではないだろうか。また、左下の根源的な部分に置かれたヘビ（衝動）は石（意志）の力で抑制されているようにも解され、物腰が柔らかく穏やかなパーソナリティは極めて強い力でコントロールされた結果なのかもしれない。

事例11：K子（11歳、小学5年生）

主訴（診断）：気管支喘息

家族：父（42歳、会社員）、母（41歳、パート）、姉（13歳、中学1年生）、弟（7歳、小学2年生）
現病歴：喘息発作は3歳の時から続いているが、姉も気管支喘息（軽症）だったため、親はそれほど気にしていなかった。しかし、小学校に入学後は発作が頻発するようになり、3年生の頃には入退院

を繰り返す状態だった。今回の入院はかなり長期（1年以上）になる見込みであるため、心理的な面への配慮を目的として精神科にリファーされた。

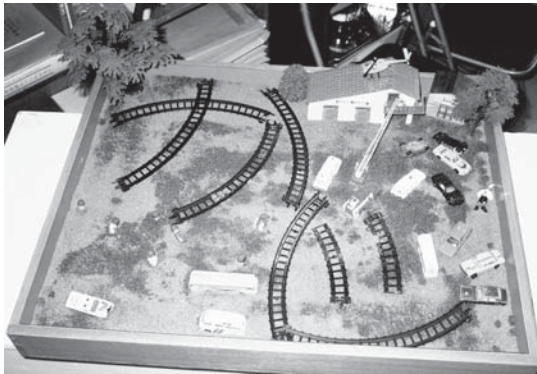


写真 11. 大火事

箱庭の説明：家が大火事になって、消防車や救急車が駆けつけている。町は大騒ぎで、交通事故も起きている。泣いている子どももいるけど、大人は助けることで精一杯。

解釈：喘息の症状はかなり重篤で、これまで頻繁に救急外来を受診してきたK子の状態を考えると、火事はイコール喘息発作と考えることが妥当かもしれない。もしもそうだとするならば、箱全体に大きく書かれた「かじ」と言う文字はK子の心の叫び（SOS）と解することができる。周囲の大人は（K子を）助けようと一生懸命になっているのだが、K子にとってはまだまだ不安でいっぱいなのだろうか。唯一の救いは、K子の潜在的エネルギーである。長い闘病生活にも関わらず、社会的で笑顔を絶やさないK子の底力が期待される。

事例 12：L男（13歳、中学校1年生）

主訴（診断）：不登校、てんかん

家族：父（39歳、会社員）、母（40歳、パート）、祖母（68歳、パート）

現病歴：2450gの未熟児で出生。顕著な発達の遅れはなかったが、身体は小さい方だった。小学校に入学するまでは育児は主に祖母がしていた。はじめてのてんかん発作は小学校入学後すぐに起きた。最初は年に1回程度の発作で生活に支障はなかったが、4年生のころから頻発するようになり、

薬も増量された。その頃から勉強に遅れを生じ、保健室で過ごすことが増えた。中学校に入学後は登校渋滞が顕著になったため、養護教諭の勧めで精神科を受診することになった。



写真 12. 動物公園

箱庭の説明：広場に動物がいて、駐車場がある。バスが来たところ。

解釈：芝生に冊はなく、一見動物（衝動）はコントロールされていないように思われるが、車やベンチ（椅子）が機械的に並べられていることを考え合わせると、これらは器質的な問題を示していると思われる。また、作品全体に有機的な関係がみられないことも特徴である。たとえば、橋が架かっているのを見ると川の存在が示唆されるが、先はトンネルになっており、このつながりも不自然である。車やバスは人の存在を示唆しているが、現実的な人間は表現されていない。以上の点から、L男の最大の問題は心の有機的なつながり（まとまり）にあると言ってもよいかもしれない。

事例 13：M男（12歳、小学校6年生）

主訴（診断）：多動、パニック、こだわり（ADHD）
家族：父（40歳、会社員）、母（39歳、会社員）、弟（10歳、小学校4年生）

現病歴：幼少時には活発でよく遊び、特に手のかからない子どもだった。小学生では落ち着きがなく注意されることが多かったが、絵を描くことが好きで、まじめで勉強もよくした（成績は中）。高学年になると、自分の思い通りにならないと大声を出したり、理屈っぽいところが他児の反感を買うようになり、徐々にクラスで浮く存在となった。

担任の勧めで精神科を受診し、ADHDと診断された。



写真 13. 暴れている怪獣

箱庭の説明：町で怪獣が暴れている。自衛隊が自動して戦っているけれど、自衛隊は犯人もつかまえないといけないし、ビルの上の人も助けられないで大変。

解釈：小学生によくある戦いのテーマという意味では問題ないが、怪獣と人間と動物が渾然一体となっており、一見してM男の混乱した状態がわかる。エネルギーは豊富に感じられ、一部冊も用いられているものの、コントロールはほとんど期待できない。また、混乱の中心が作品の右側に表現されていることは、家庭や学校など外界との関係で問題が生じていることを示している。事態の収拾の鍵を握る自衛隊がうまく機能するためには、援軍を送ることよりも外部刺激を少なくし、落ち着きを取り戻すことが先決かもしれない。

事例 14：N男（11歳、小学校5年生）

主訴（診断）：情緒不安定（統合失調症）

家族：母（33歳、会社員）、弟（9歳、小学校3年生）

現病歴：出生時には特に問題はなかった。幼少時に3回ほど自家中毒で小児科を受診したことがある。幼稚園では一人遊びが多いことを担任から心配されたが、問題行動はなかったのでそのまま様子を見た。小学校に入ってから昆虫や宇宙に興味を持ち、図鑑や絵本を片端から読み漁る子どもだった。友達は少ないながらもいて、テレビゲームは人並みにしていた。しかし、5年生になった頃

から漢字の書き取りなどに対する拘りが強くなるとともに、周囲の言葉掛けに返事をしないことを心配した母親が教師に相談し、精神科を受診することになった。



写真 14. 無題

箱庭の説明：未聴取。

解釈：箱庭制作に抵抗は示さなかったものの、実際に始めると落ち着きがなくなり、怪獣やロボットを一行に並べた後、急に何も言わずに部屋を出て行った。その間、わずか3分程度だった。

状況的に完成作品とは考えられないが、非現実的な生物が一行に並んでこちらを見ている状態は、非現実感を伴った外界に対する脅威感を示しているのではないだろうか。そして、制作中に急に不安が高まったため、N男はそれにたまりかねて部屋を出て行ったものと考えられる。唯一（左下に置かれた）教会が精神的な救いの存在を示唆しているが、N男にとってはせいぜい逃げ場所としての機能しか果たしていない可能性がある。

6. おわりに

これまで述べてきたように、世界テストなど海外における一部の試みを除き、これまで箱庭が心理アセスメント技法として用いられたことはほとんどなかった。しかし、箱庭に制作者の心理が反映されることは事実であり、実際箱庭作品の解釈はこれまでも臨床の中で日常的に行われてきた。そこで、筆者は箱庭を心理療法としてではなく、心理アセスメント技法としての箱庭の可能性を探ってきた。その結果、従来使用されている箱庭用具

一式と通常の教示を用いて制作した箱庭作品を解釈することで、被験者の心理について有用な情報が得られることが示唆された。

筆者は、バウムテストと同様に箱庭作品は一種の「心のスナップ写真」だと考えている。ファインダーを向けられた被写体（制作者）は自然な姿を見せる場合もあろうが、カメラを前に身構え、なかなか本当の姿を見せてくれない場合もあるだろう。また、決してそこに被写体の全てが映し出されるわけでもないが、ある方向性から箱庭をいうフィルターを通してみた被写体（制作者）の一部が映し出されていることは確かである。

また、相馬ら（1994）が系列的視点による分析の意義を検討するために箱庭の3回連続制作を試みているように、一枚のスナップ写真では被写体（制作者）の一面しかわからなくても、複数の写真を撮ることでより実際の被写体（制作者）像に近づいていくことができるかもしれない。今後、より重層的で確実な心理アセスメントをする方法として複数制作法を検討する意義があるように思われる。

さらに、箱庭を心理アセスメント技法として利用する場合、「家族で何かしているところを表現してください」とか「あなたの人間関係を表現して下さい」といった特定の教示を用いることで動的家族画や対人関係地図のような使い方も可能かもしれない。

いずれにしても、弘中（1987）が基礎研究の意義の一つとして「箱庭表現の理解やクライアントの理解に役立てることを目指す視点」を挙げているように、箱庭のアセスメント技法としての利用を促進させられたためには今後もより多様な研究が期待される場所である。

引用文献

Bolgar, H. & Fisher, L. (1947) : Personality projection in the World Test, *Amer. J. Orthopsychiat.*, 17, 117-128.
 Bühler, C. (1950) : *The World Test*, Los Angeles, Calif., the Author.
 Erikson, E.H. (1950) : *Childhood and Society*, Penguin Books.
 藤井しのぶ (1979) : Sand Play Technique の再検査信頼性 京都大学教育学部紀要 25, 223-232.

平松清志 (1998) : 日本における精神分裂病の箱庭療法に関する文献的研究 箱庭療法学研究 11 (1), 47-54.
 平松清志 (2001) : 箱庭療法のプロセス—学校教育臨床と基礎的研究 金剛出版
 平松清志 (2007) : 学校現場における箱庭療法 臨床心理学 7 (6), 777-781.
 弘中正美 (1987) : 書評・岡田康伸著「箱庭療法の基礎」/木村晴子著「箱庭療法—基礎的研究と実践」 心理臨床学研究 4 (2), 68-72.
 岩堂美智子・木村晴子 (1970) : 箱庭療法に関する基礎研究 大阪市立大学家政学部紀要 18, 183-192.
 Kalfff, D.M. (1966) : *Sandspiel, Rascher Verlag—Seine therapeutische Wirkung auf die Psyche* (河合隼雄監 (1972) : カルフ箱庭療法 誠信書房)
 片岡史穂子・峰島朝子 (1995) : 箱庭表現と Y-G 性格検査の関連性についての一考察 人間研究 (日本女子大学教育学会) 31, 103-109.
 河合隼雄 (1969) : 箱庭療法入門 誠信書房
 木村晴子 (1985) : 箱庭療法 創元社
 草野亮・本田徹 (1990) : アルコール依存症者の箱庭について 日本芸術療法学会誌 21 (1), 81-87.
 草野亮・山野俊一 (1993) : アルコール依存症者の箱庭療法—「人」のテーマを中心にして 日本芸術療法学会誌 24 (1), 125-131.
 Lowenfeld, M. (1939) : *The World Pictures of children*, *Brit. J. Med. Psychol.*, 18, 65-101.
 松岡武 (1972) : 色彩象徴テストの原理と方法 日本製版
 三木アヤ、光元和憲、田中千穂子 (1991) : 体験箱庭療法 山王出版
 永井徹・井上保子 (1995) : 箱庭療法における基礎研究—青年期との発達課題との関連と制作過程における気分の変化について 東京都立大学人文学部・人文学報 258, 47-65.
 西村州衛男 (2001) : 箱庭療法における表現内容の解釈仮説 相山女学園大学研究論集第 32 号, 69-78.
 野田暢子 (1995) : 箱庭療法による生徒理解に関する研究 兵庫教育大学学校教育科修士論文 (未公開)
 大石弘 (1977) : 精神遅滞児の箱庭表現に見られる特徴 日本心理学会第 41 回大会発表論文集 1008-1009.
 大石弘 (1983) : 箱庭作品の個性とその持続性について 山形大学教育学部心理教育相談室紀要 2 53-65.
 大石弘 (1988) : 精神分裂病者の箱庭作品について (その 2) 日本心理学会第 52 回大会発表論文集 332.
 岡田康伸 (1972) : サンドプレイ技法の研究 京都大学教育学部紀要 18, 231-244.
 岡田康伸 (1984) : 箱庭療法の基礎 誠信書房
 岡田康伸 (1993) : 箱庭療法の展開 誠信書房
 岡田洋子 (1962) : 幼児における情緒障害診断の試み 東洋

心理アセスメント技法としての箱庭の可能性

英和女学院短期大学論集 1、31-49.

齋藤紫をん (1992) : 不登校児の箱庭表現に関する数量的研究 箱庭療法学研究 5 (1)、39-50.

杉村省吾 (1980) : サンドプレイにおける向性と空間象徴に関する一考察 臨床児童心理学の実際 昭和堂 277-284.

竹内健児 (2007) : 村テストの実際 (岡田康伸、皆藤章、田中康裕編 (2007) 箱庭療法の事例と展開) 創元社

丹治光浩 (1988) : 合同箱庭療法の意義 心理臨床学研究 6 (1)、31-41.

山下勲 (1964) ウェルトテストに関する方法論的研究 広島大学教育学部紀要 13 (1)、145-155.

山下景子 (2004) : E.H.EriksonのDPT(Dramatic Productions Test) の教示を用いた箱庭制作—教示の影響について」徳島文理大学研究紀要 67、49-56.

山下景子 (2007) : エリクソンの Dramatic Productions Test (DPT) 再考 岡田康伸、皆藤章、田中康裕 (編) 箱庭療法の事例と展開 創元社